NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS

B!E NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS ART & DESIGN CENTER NEWS

2011.Vol.30

集団 表現

Collaboration work

多様な技術や考え方の組み合わせ

最近、芸能界では日本のアイドル「AKB48」、韓国のアイドル「KARA」や「少女時代」などガールズグループの活躍が華やかな話題を振りまいている。メディアや観客を飽きさせない仕掛け・方法で、様々な年代に応えつつも新たな階層ニーズを取り込むような増幅・増殖型の戦略などを絶えず行っていて、大衆やファンの心理(感情移入)を掴む(感情操作)ことにかけては見事と言うほかない。

多くの人が携わるということでは、音楽や演劇や映画やダンス以外にも、伝統文化・神事・祭事もそうだろう。また、工業製品から新聞や雑誌などメディアの世界だって例外でない。多くの人間が関わることで一つのかたちを生み出すことが集団活動・表現の概念に当てはまるのであれば、これらもそうかもしれない。

では、アート界に目を移そう。

このごろは、高嶺格、やなぎみわ、森村泰昌をはじめ、多くのアーティストが固定あるいは不定メンバーによるクリエイションチームを形成し、複数のテクニシャンやアーティストと協働(コラボレーションワーク)している。技術者や表現者が集う事が、アーティストとしても、表現面においてもスケールを更に増大させる。これらは、インターネットを駆使して活動していく時代との巡りあいによるところも大きく、広報やマネジメント力などの事務機能の強化や充実にもつながり、成果が出易くなったというところだろう。

1960年代には美術家、音楽家、美術史家でデザイナーでもあるリトアニア系アメリカ人のジョージ・マチューナスが主唱したグループ「フルクサス」運動があり、その活動に日本人アーティストのオノ・ヨーコや音楽家の一柳慧など様々なジャンルの多くの日本人が参加し、互いに何かしらの影響を享受しながら実験的行為を行っていたことでも知られる。マチューナスは芸術共同体としての活動を夢見たが、自由な表現を求める参加者との考え方の差を埋められず、それを成し得ることができなかった。

集団表現はただ、ジャンルや人を横断するためだけで成立するのではない。その活動が法人なのか、任意団体なのか、仲良しグループなのか、社会的な振る舞いによっても差異が出てくる。また、時代の思想や社会背景にも大きく影響を受ける。さらに、集団表現はルールを作ったらまた直ぐ壊すといった実験的な性格をも持つため、相応しい規範・定義付けが難しいこともあるだろう。それがないままに、様々な活動が自由になされてきたのがその実情であろう。

大崎正裕　美術学部教授

レポート REPORT 01

2010名古屋芸術大学創立40周年記念特別公開講座

<MCD>project　ホンマタカシ 公開ワークショップ　講演会

2010年10月15日[金]・22日[金]・11月5日[金]

デザイン学部メディアコミュニケーションデザインコースの主催で、写真家のホンマタカシ氏を特別講師としてお迎えし<「今日の写真」を考える>をテーマに講義とワークショップが行われました。1回目の講義では、ご自身の作品をプロジェクターで映し、そのコンセプトや状況などを率直に語って頂きました。その後<写真の歴史から表現方法を学ぶ>へ講義が移り、次回以降のワークショップ・モダニズムへの理解と導入に繋がっていきます。

ホンマ氏が出された最初の課題は「決定的瞬間」と「ニュー・カラー」を撮影してくる事。2回目以降は作品の講評を中心に進められました。学生それぞれに作品に対するシャープでユーモアのあるコメントと具体的なアドバイスがあり、学生本人もまた他の参加者も真剣な表情で聞き入っていました。

ホンマ氏の、写真を通して現代美術から広告までメディアと表現の可能性を拡張してこられた強さが、学生に新鮮な刺激となって伝わっていました。

櫃田珠実　デザイン学部准教授

「ホンマタカシ　ニュー・ドキュメンタリー」
金沢21世紀美術館にて開催中　**3月21日[月]まで**
東京オペラシティ アートギャラリー　**2011年4月9日[土]ー6月26日[日]**

予告 FUTURE EVENT 01

第38回 名古屋芸術大学卒業制作展
第15回 名古屋芸術大学大学院修了制作展

名古屋芸術大学卒業制作展

2011年3月8日[火]— 3月13日[日]

●愛知県美術館ギャラリー〔愛知芸術文化センター8階〕
10:00-18:00（金曜日は20:00、最終日は17:00まで）
【美術学部】絵画科（日本画・洋画）・美術文化学科
【デザイン学部】デザイン学科【大学院デザイン研究科】

●名古屋市民ギャラリー矢田
9:30-19:00（最終日は17:00まで）
【美術学部】造形科・版画選択コース
【デザイン学部】デザイン学科

●名古屋芸術大学西キャンパス〔アート＆デザインセンター〕
10:00-18:00（最終日は17:00まで）
【美術学部】絵画科（洋画）【デザイン学部】デザイン学科

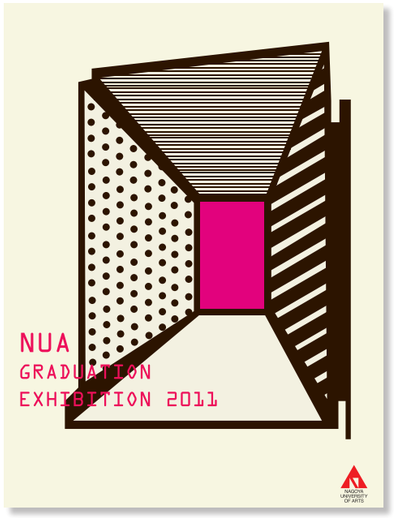
●映像作品上映会〔愛知芸術文化センター12階アートスペースE・F〕
3/11（金）18:00 - 20:00
3/12（土）10:00 - 20:00

名古屋芸術大学 大学院修了制作展

2011年3月1日[火]— 3月6日[日]

●名古屋市民ギャラリー矢田
9:30-19:00（最終日は17:00まで）【美術研究科・デザイン研究科】

卒業制作展記念講演会（入場無料・要整理券）
3/12（土）14:00 - 16:00〔愛知芸術文化センター12階アートスペースA〕
講演：篠山紀信「現代を激写する」
※お申し込みは終了しました。



2011 3-5 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:15ー18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝日休館　入場無料　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

4/ 4 月 → 4/13 水	デザイン学部レヴュー選抜展
4/15 金 → 4/20 水	『不思議な人体』展
4/15 金 → 4/20 水	『保存温度5℃以下』展
4/15 金 → 4/20 水	写真部展
4/22 金 → 4/27 水	ひにく展
4/22 金 → 4/27 水	重なる視線
4/22 金 → 4/27 水	インスタント美術
5/ 6 金 → 5/11 水	創作折紙作品展
5/ 6 金 → 5/11 水	ビューティフル☆ドリーマー
5/ 6 金 → 5/11 水	右側に壁
5/13 金 → 5/18 水	バンコク　スリナカリンウィロット大学　交流展覧会
5/20 金 → 5/25 水	『版の方法論#6；バンコクと名古屋から』展
5/20 金 → 5/25 水	peace nine 2011 展
5/27 金 → 6/ 1 水	Unnatural

編集後記

新しい年を迎えた慌ただしさから、気づけば卒業・修了制作展が目前となっていました。何度か言葉を交わした学生たちも、不安と希望を抱えて新しい社会へ歩み出す季節です。切磋琢磨して取組んだ学生時代を糧に、臆することなく目指すものに近づいていけますように。

吉安恵子(アート＆デザインセンター)

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL[0568]24-0325　FAX[0568]24-2897

B!E Vol.30
発行日　2011年3月3日
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp
2011　Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts
デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

集団表現
Collaboration work

我が国の新旧集団表現グループを知る限り挙げてみる。

古くは、関西の抽象美術の先駆者・画家の吉原治良の「人の真似をするな、今までにないものを作れ」を指標に、阪神地区在住の金山明、嶋本昭三、白髪一雄、田中敦子等が応えて、1954年に「具体美術協会」が結成された。彼等は従来の表現や素材を次々と否定して新しい美術の世界を提示した。60年代から70年代初頭にかけて、加藤好弘、岩田信市、小岩高義らが中心となって不特定多数のメンバーが人間をゼロの次元に導く行為として全裸"儀式"を行った名古屋の「ゼロ次元」活動。それから、高松次郎、赤瀬川原平、中西夏之の3名によって60年代前半に結成された前衛芸術グループの「ハイレッド・センター」の他、「PLAY」もある。

1980年代には、松陰浩之と平野治朗が1987年に結成した関西発アート・ユニット「コンプレッソ・プラスティコ」、個人名を一切明かさず機知に富んだ現代的な表現を絶えず発表した謎の集団「アイデアル・コピー」などがある。また、演劇、ダンス、映像、美術、音楽、デザイン、建築などの異領域出身者が集まり、音響やコンピューター制御された舞台装置にパフォーマーといった要素を加え、アイロニーやユーモアを交えて、生と死の境界、記憶、高度情報化社会やジェンダーやエイズなどをめぐる問題をコラボレーション表現している国際派の「ダムタイプ」もそうだ。

1990年代には土佐信道プロデュース、中小電気メーカーを模して多くの製品(作品)を生み出した芸術ユニットの「明和電機」やダンサー・振付師の坂本公成が主宰する「モノクロームサーカス」、1996年に映像作家の石橋義正を中心に結成した映像・パフォーマンス集団「キュビキュビ」、「ラジオ・モデュール」、映像・デザイン・サウンドなど様々な領域で国際的に柔軟な活動をみせる「softpad」などがある。

softpad　作品(unicode)　2008年

1980〜

2000年代では各地に赴き、そこで一般募集した参加者とその場で出し合った、或いはその街で集めたアイデアを共有し、即興的に実行する一過性の参加型表現集団の「wah」、それから京都にギャラリーやショップを構え、村上隆と組んでの活動も開始、日本のアートシーンへ鋭く切り込む企画やアイドル的容姿により2010年のアート界を賑わしている男子4人のアートグループ「0000」がいる。

2000〜

その他にも、活躍した年代は様々だが、83〜88年生まれの多摩美術大学在学生11人で活動を開始した「オル太」や、これも多摩美術大学だが、油画専攻卒業生を中心に結成された9人のアーティスト・コレクティブ「MIHOKANNO」、2005年のサンフランシスコでの会田誠個展開催に合わせアート界デビューし、動物の生死や都市におけるタブーな問題等、刺激的なテーマを扱うアーティストグループ「chim↑pom」、いま売り出し中の遠藤一郎たちの活動「now」、そして刺激ある活動をしている「20TN!」、他にもアーティストの藤城嘘によって2008年から行われている展示&ライブイベント企画「CHAOS*LOUNGE」、「FRESH」、建築家4人で構成しているユニット「みかんぐみ」や 1993年から活動の霜田誠二が企画の「ニバフ」などもある。また、デザイン集団ではグラフィック、ムービー、プロダクトなど多種多様なデザインを行う「グルーヴィジョンズ」、オリジナル家具の企画・製作・販売、店舗・住宅設計、プロダクトグラッフィックデザイン、ブランディング、アートから食に至るまで、多方面で世界的な注目を浴びているクリエイティブユニット「graf」などが活躍している。

「ア"ーッ!ラジオ(a"aarts!RADIO)」　2010年
撮影：怡土鉄夫

コンテンポラリーダンスカンパニー Monochrome Circus とクリエイター集団 graf による
パフォーマンス作品"TROPE"より
2011年1月／会場:MATSUO MEGUMI + VOICE GALLERY pfs/w
撮影：下村康典(Shimomura Photo Office Inc.)

我が大学にもグループ活動「ア"ーッ!ラジオ(a"aarts!RADIO)」がある。この集団活動はメンバーを一部入れ換えながら、2010年で4回目を迎えた。これは主に名古屋芸術大学洋画2コース在学生を中心に、コミュニティー文化をつくるべく、美術関係者とのトーク番組や関連企画などを立案し、実行する屈指の大型イベントである。プロジェクト開始と同時に仮の施設である「仮設」-構想領域研究室が設けられ、電波による三日間限定のFMラジオ放送実施日までの具体的な物事が決められていく。A&Dセンター中階にラジオ放送スタジオが設置された時は、まさに感動ものだ！本番終了時には参加者達は主体性・コミュニケーション能力・実行力・創造力などが身に付いていく。4回目のア"ーッ!ラジオ活動は新聞に掲載され、ケーブルTV放送でも毎日2分間6日連続で放映された。また、先回に学外で催した「雑学術」が「ア"ーッ!ネットTV(a"aarts!netTV)」と形を変え、2011年に始動する。これも我が大学発の集団表現活動の一つになるであろう。

美術の世界は一人で芸術活動をする人が大半だが、集団にかかわり表現活動するアーティスト達もいる。それは、集団表現には一人きりで活動するのとは違い、寄り添い、協動することで個人の力を超えたスケール感が実現でき、また、集うことのパワーにより現実を超えることが可能と思えることに醍醐味を感じたいがためなのかもしれない。芸術の概念さえ変えられる底知れぬ集団力に期待をこめつつ、これからも集団表現を追いかけるつもりである。

大崎正裕　美術学部教授

本稿の執筆にあたり、ヴォイスギャラリー代表;松尾恵氏とアイランドジャパン(株)代表;伊藤悠氏をはじめとした方々に情報提供のご協力を頂きました。ここに記して謝辞とさせていただきます。　※作家名は敬称略

ほか、以下もある。
「AES+F」:文化や民族の融合・対立・衝突など、冷戦後の現代社会が抱えているイデオロギーやアイデンティティの問題をモチーフにデジタル技術を用いた写真・CG作品でプロジェクト展開している。
「AES+F」はモスクワを拠点に活動している４人のアーティストメンバーの頭文字を綴ったグループ名。
「スタジオ・アッズーロ」:1982年よりミラノで始動した実験映像集団。
90年代半ばよりインタラクティブな作品を制作。
「Responsive Environment」:建築・メディアアートユニット。
「remo」:記憶と表現とメディアのために活動するNPO法人。
「wowlab」:映像インタラクティブスタジオWOWのスタッフで構成されたユニット。
クライアントワークとは別に、映像を新しい視点でデザインするため、自由な実験を行っている。
「ART+COM」:コンピューター利用を研究するスタジオ。

参考文献；「トランスフォーメーション」中沢新一、長谷川祐子 企画・監修　ACCESS
「美術×映像」松本俊夫 著　美術出版社

REVIEW

ファン・デ・ナゴヤ美術展2010　黒へ／黒から
2011年1月13日[木] – 23日[日]　名古屋市民ギャラリー矢田　第2〜7展示室

良き作家は、より良い鑑賞者でもある。これは私の持論。優れた作家とは、自分自身を含めた制作や作品について客観的な眼差しをもつことができる、つまり、高い鑑賞能力を矜持しているからだ。では、良き作家は、より良い批評家や企画者たりえるかというと、話は違ってくるだろう。

果たして良き作家は、より良い企画者でありえたか……!?

2010年度から私は、「ファン・デ・ナゴヤ美術展」の企画委員をつとめることになった。この美術展は、名古屋市文化基金を活用して行われる企画コンペティションで、この年から選者にあたる委員が全員入れ替わった。旧知の土崎正彦さん(白土舎)、倉地比沙支さん(愛知県立芸大)、小林亮介さん(名古屋造形大)とご一緒と聞いて快諾したものの、最初の会議で、実は皆で頭を抱えた。若手企画者の育成を目的として1998年から継続されている事業ではあるが、予算は減少しており、市民ギャラリー矢田の７つの展示室全部を使いこなすには、企画者の力量というよりも事業費が厳しいという現状。2010年度からは複数企画の選考の方針が模索されて、1室あたり約10万円程度が助成されるという方針となった。一委員の立場で、そもそものコンセプトや事業枠に口を出すにも限度があり、さらにこの年の間が悪いことに、同時期に公募された「あいちトリエンナーレ」の企画コンペは1企画100万円を上限とする実費助成だというのだ。

短い応募期間の末、9件が応募。書類選考で5件となって、企画者のプレゼンと面接と相成った。何とも不安な選考委員会のはじまりだったのだが、実は途中から、「これは何とかなるぞ！」という期待に変わっていった。結果、片山浩さんの「黒へ／黒から」と小栗沙弥子さんの「From　Thank-Cyū〜山中から・もんもんとのつきあいかた〜」が選ばれた。

川田英二

片山浩さんは、94年に本学の版画コースを卒業して愛知県立芸大の大学院で学び、リトグラフを中心とした作家活動を展開。現在は本学の版画コース非常勤講師として親身に学生たちの指導にあたっておられる。片山さんが自作を含むグループ展ではなく、ひとりの企画者として応募されたのは、少々意外だった。しかし、そこに制作者としての真摯な情熱と共存する客観的な眼差しがみてとれた。企画の中心にあるのは、「銅版画」に取り組んできた作家たちに特有の「黒」への美意識やこだわりへの問いである。なるほど、"作り手ならでは"の視点で、制作に寄り添った企画だと納得ができた。しかも企画意図が渋くも地に足がついている。もともと1室に5作家で提案されたものを、6室10作家に企画を拡大、充実をはかっていただいた。

いよいよ新年があけて展覧会が開催された。選考からもう一年以上が経っていた。同時開催の小栗さんとも良好な関係で協力、連携しながら準備を進め、美しい印刷物も印象的であった。展示は、文句無く美しかった。ベテラン作家(**武蔵篤彦、鈴木広行、エンク・デ・クラマー**)のまだ若き時代の「黒」と対峙する重厚な銅版画は壮観。そこに、まだ若い**山口恵味**(本学大学院在学)の諧謔と詩情が交錯するアクアチントが共存する。**東条香澄**のリトグラフ、**川村友紀**や**森田朋**のエッチングは、繊細かつ元気な若手女性作家の多様性を示し、そこに中堅の**川田英二**が理性的な版の実験をステンシルアクアチントやブロンズの立体で提示し、存在感を示した。また近年、発泡性の表面をもった印象的な立体で活躍の機会を得てきた**阿部大介**は、雁皮紙の作品も試み、痕跡としての版の意味と豊かさを醸し出した。そして、なんと言っても嬉しかったのは、**尾野訓大**の写真作品。尾野は2007年に本学大学院を修了し、その後の活動のことを知らなかったのだが、こんなにも精緻な作品を創るまで成長されたのだなと、感じ入った次第。街の暗闇の中に浮かび上がる光と、漂う寂寥。技術もさることながら、写真も版であり時間の芸術なのだという軸の定まった展観であった。

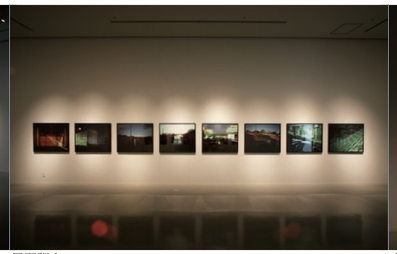
"森を漂うような展示にしたい"、そう片山さんは意図したという。たしかに、複数作家を交差させた反復のある展示構成は、観客を行きつ戻りつさせた。それは「版画の展覧会」という既成枠を超えて、心地よい変化の中で「黒」の世界観が浸透し深化する彷徨いの時間でもあった。

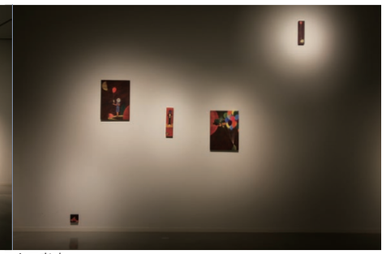
「つくる現場とその時間を知っている作家を選んだ。そして、自分は作品を出さないけれど、ひとりの出品者でありたかった」という片山さん。あえて、「反省点は？」と聞いてみると、「整い過ぎたというか…コントロールしすぎて、破綻がなかったかも」と余裕の発言。なるほど、人選や構成もバランスと抑制が効いていた。委員の立場では喜ばしいこと至極なのだが、同じ企画者の立場からすると、"作家ならではの企画"がここまで緻密に成立すると、ちょっと複雑な気持ち。"良き作家"に向けて……正直、羨ましかったと言っておこう。

※作家名は敬称略

高橋綾子　美術学部准教授

エンク・デ・クラマー、阿部大介、他


尾野訓大


山口恵味

撮影:尾野訓大

ART WORDS FROM THE ART WORLD

1992.JAGDAポスター大賞

グラフィックデザイナー／ヴィジュアルデザイン科教授
佐藤　浩
Hiroshi　SATO

芸術一話　第6話　デザインの力で社会に発言を！

私の所属するJAGDA「日本グラフィックデザイナー協会」では、1983年からの15年間、平和や環境などの社会問題についてアピールするポスター展を開いて来た。日頃広告や編集、企業等の仕事をしているデザイナーが、自主的な活動として自費制作した作品を出品し、毎年150点位のポスター展を組織して全国巡回をして来た。この運動は多くの賛同を得て国際ユネスコ機関の表彰を受けた。1995年フランスの核実験に反対して、U.G.サトー氏の呼びかけでスタートした反核FAXポスター運動に150点の作品が集まり、A0判に拡大されたこれらのポスターがパリの街をデモ行進した。これが大きな反響を呼び、共感する外国のデザイナー達を巻き込んで国際的なFAXポスター運動に発展した。募集から1週間という短い制作期間と即時性、黒白のみの表現、ポスターが街頭を行進するという展示方法、これぞ視覚コミュニケーションの原点と思わせる新鮮な力が有り、ヴィジュアルの持つ力を改めて感じた。

第一線で仕事をしている国内外のグラフィックデザイナーの多くが多様な社会ポスターの制作を通じて発言をしている。1枚のポスターに何が出来るかと言われれば答に窮するが、その1枚のポスターが多くの共感や感動を与える力も充分持っている。又これらの発言の継続が国を超えて人々の意志を結んで行く。君達もデザイナーとして仕事についた時、一市民生活者として、一地球人としてデザインの力を使って社会へ発言して行く事も大事な仕事の一つである。